

## 全国唯研ニューズレター掲載新刊書短評

(第99号～101号掲載分)

### 【第99号掲載分】

#### 『実在論的社会理論

##### —形態生成論アプローチ』

マーガレット・S・アーチャー著／佐藤春吉訳

(青木書店、6600円＋税、2007年)

本書は、イギリス・ウォリック大学の女性社会学者、マーガレット・アーチャー (Margaret S. Archer) の主著 < Realist social theory, the morphogenetic approach, Cambridge University Press, 1995 > の翻訳である。訳者の佐藤春吉氏は、多元的存在論の構築という自身の研究モチーフを進めるなかで出会った理論だとしているが、いずれにしてもじっくりと検討し、討議するに価する社会理論ということができる。ちなみに、アーチャーは、批判的実在論として日本でも紹介されるようになったR・バスカーらの研究グループの中心メンバーであり、国際社会学会で会長を務めた経験があると言う。

さて、訳者に紹介によれば、この浩瀚な本書のスタンスは、社会的実在性の把握をめぐる、方法論的個人主義と方法論的集合主義との対立にかかわり、どちらかの「主義」への還元をこととする一元論的傾向を「合成主義」として批判し、「分析的二元論」の立場を積極的に対置することである。それはかつてより分節化され、その影響関係が論じられてきた「構造」と「エイジェンシー」とを多元的な階層的存在としてとらえなおし、それらのあいだに複合的な影響関係と多元的な重層決定とを介した創発的關係の存在論を見出すことである。

もともと、本書で展開される理論枠と諸概念をこの場で正確に紹介することは至難のわざである。だが、著者の意図が、一方でギデンスのように社会を構成する諸要素を実践の流動性に解消する構

造化理論を批判するとともに、他方で、ポスト・モダニズムの「物語終焉論」や人間主体否定論へのアンチテーゼであることは言い添えておきたい。彼女はそれらを越えて、「形態生成論」の主張によって、社会の構造的変革の可能性とその諸条件さえ理論の射程に収めているのである。

このように大著であり、複雑かつ堅固な理論書の翻訳に地道に努力された訳者の労を思わざるを得ないが、いずれにしても、ここから現代の社会理論にとって、また社会生活にとって、さらに実り豊かな帰結が引き出されることを願うばかりである。

#### 『人為と自然

##### —三木清の思想史的研究』

津田雅夫著 (文理閣、3000円＋税、2007年)

本書は近年、和辻哲郎論など昭和思想史にかかわる仕事を公刊している著者の異色の三木清論である。三木は戦前戦時下の抵抗力のある哲学者としてつとに知られ、マルクスの解釈学的な読解やヒューマニズムの再規定、『構想力の論理』に見られる「形の論理」の構想、東亜共同体論などで知られてきた。だが、著者はむしろ本それらを取りまとめて、不定形となり不安を呼び起こす「近代」と格闘した三木の影の側面に意識的に光を当てている。その構図はタイトルに示されるように、自然から作為への論理を展開した戦後思想にたいして、人為から自然への方向を模索した三木である。つまり、解釈学的な基盤からスタートした三木が解釈学的有機体説や既成宗教を批判し、根源的な自然や現実といったものへと作動しながら、同時に無からの「混合の弁証法」が希求され、ジレンマと未完のうちに終結したとするのが、著者の描くアウトラインといえよう。

全体として著者は、不定形さを露呈し、思想素

材と化した「三木」をリアルに描き出している。たしかに、輪郭のある三木清像を描くことは自己矛盾なのかもしれないが、それでも「力動的な客観的自然主義」といった概念や、補論として扱われるポッフエンファーとの対比は、そうした三木像の隘路から脱出するための著者からの示唆と受け取ることができる。いずれにしても、本書には日本近代の思想的問題が凝縮され、曝け出されている。

### 『リベラリズムとコミュニタリアニズムを越えて』

ロバート・R・ウィリアムズ著／牧野広義・

形野清貴ほか訳(文理閣、4500 円＋税、2006年)

アメリカ・ヘーゲル学会において「ヘーゲルの法哲学」が課題になったさいに報告された諸論考の日本語訳。「ヘーゲルによるカントの道德性の批判的獲得」「ポストコロニアリズムと権利」「身体における自由」「ヘーゲル政治哲学における社会契約論と承認の政治」「法、文化および立憲主義」「ヘーゲル法哲学における国家の(諸)目的」など12論文が収録。リベラリズムとコミュニタリアニズムを超えられたかどうかはともかく、これら近年の思想を意識してヘーゲル法哲学が論じられており、ハーバマス、フーコー、ロールズも俎上にのせられる。

当然ながら論点は多岐にわたり、ヘーゲル法哲学の射程の大きさを実感するとともに、社会哲学の諸分野について勉強になる本である。本文約350頁という大部な翻訳を生み出した大阪経済法科大学の研究会に憧憬と敬意の念を禁じえない。

### 『現代倫理の危機』

牧野広義・藤井正則・尼寺義弘著

(文理閣、3000＋税、2007年)

今日いたるところで社会のひずみが生じていることは誰もが感じているだろうが、それを倫理学・スポーツ哲学・経済哲学の各専門家が論じた

本。第Ⅰ部は、自由主義をめぐる加藤尚武批判にはじまり、ロールズ・セン・ハーバマスの理論が検討される。牧野氏はとくに経済学者センを評価しつつ、それを倫理学者が人間論や権利論や民主主義論として深めるべきだとするが、それにしても牧野氏の昨今の活躍ぶりには目をみはるものがある。第Ⅱ部は、国民に国歌と国旗を強いるとともに忠誠と熱狂を生産する存在であるスポーツについて、ドーピングとフェアプレイを軸に、そこでもとめられる倫理をさぐる論考である。日本における反ドーピング論とフェアプレイ論の系譜にくわえて、L.ジープらドイツでの論調がおおきく紹介されている。スポーツ倫理は唯研であり論じられてこなかった主題であり、今後の深化が期待される。第Ⅲ部は、小泉改革にともなう負の遺産を検証し、深刻な昨今の雇用問題にそくして国家への提言をしめす論考のほか、ヘーゲル研究が3本ふくまれている。3本とは、ヘーゲルによる政治経済学の把握、『大論理学』の目的論のていねいな解釈、『法哲学』における市民社会論と欲求の体系論を主題とするものである。やや専門的な論考であるが、本腰を入れてヘーゲルを学ぶさいには裨益するところ大であろう。

### 『いのちを生きる いのちと遊ぶ』

清 真人著(はるか書房、1800 円＋税、2007年)

副題に「生 (life) の哲学」とある。著者が自身の絵を路上販売しながら旅したアテネ・ナポリで出会ったマルコたち下層の人びと。大阪生野でコリアボランティア協会をつくった康秀峰さんの壮絶な「愛」の生き方。母親にタリウムを盛った少女のブログに残された、死の闇に囚われた絶望的な生きがたさ。16年間寝たきりの闘病生活の後に重度身体障害者の演劇活動に入った福森慶之介さんの「遊ぶ」生き方。それぞれの生のかたちが、対話を駆使した著者の語りによって一気に読むものの内面に迫ってくる。

人間の生の光と闇。「光をはっきりと感じ、光を把持するためには闇を見つめなければならない」、「闇に戦慄するためには……一点の光でも、それ

を光として把持していなければならない」と、著者は言う。たしかにそれぞれの生のかたちが折り重なって、「生の哲学」を喚起する。「アカデミズム的思考」から解放されたとき、哲学が「いのちを生きる」ことであり、「いのちと遊ぶ」ことを、著者はみずからの出会いと作品を通して読者に提示している。

## 『〈生きにくさ〉の根はどこにあるのか

### ——格差社会と若者のいま』

中西新太郎著

(NPO 前夜発行、JRC 発売、1300 円＋税、2007 年)

絶対的貧困という、日本資本主義はすでに克服した…と一部では考えられてきた事態が、90年代以降、そして今世紀に入って急速に広がりつつある。年間3万人を超える自殺者の数が象徴するように、「生存権損壊」という究極の事態へとこの国は急速にスパイラル下降をはじめている。その圧力は、たとえば老人医療水準の全面的切り下げをとおして、戦中戦後の日本を支えてきた高齢者にも無惨にのしかかっているが、それと同じぐらい、あるいはそれ以上に、これから社会へと招かれるべき子どもや若者の全身（全霊）にのしかかっている。いわゆる「パラサイト」、「ひきこもり」、「ニート」「ジコチュー」…など、「自己責任」の語法で記述される若者の負のありかたが、実際にはどういふものであるのか、また、現代社会の複雑なメカニズムをとおしていかに形成されてきたのかを、中西氏は豊富な若者文化の一次資料をとおして推測し、内面から再構成しようとする。こんなに生きづらい世の中を、しかも生きづらいなどという表明を封印して生きなくてはならない若者の心象風景がどれほど凄惨なものであるかに、読者は息をのむだろう。「カワイイ」「ラブラブ」「化石願望」「J 国家主義」「萌え」「戦闘美少女」…。これらの錯綜したコンセプトを丁寧に解き明かし、それを現代社会の沈黙した構造へと関係づけようとする貴重な試みの書である。比較的小さ

な本だが（136 頁）、読むのには時間がかかるかもしれない。

構成は以下のとおり。

- I ねじれた抑圧構造のなかの若者たち
- II 日本社会の抑圧・支配の新たなメカニズムを解く  
(1 現代日本の国家主義感覚 2 「構造改革」と自己責任 3 人間を消費する文化 4 「シニカル」理性と権力)
- III <生存権> 損壊の時代——「格差」の何が問題か

## 【第 100 号掲載分】

## 『1930 年代・回帰か終焉か

### ——現代性の根源に遡る』

桑野弘隆・山家歩・天島一郎編著

(社会評論社、3570 円、2007 年)

1930 年代をテーマとした共同研究の成果。10 篇の論文を収める。30 年代は未曾有の危機の時代であったばかりでなく、総力戦・総動員体制ないし国家独占資本主義が成立した時期という意味で、再検討を要する様々なテーマを提供してくれる。この論文集が扱うのは、ポランニー『大転換』を手がかりとした 30 年代論から始まって、日本の国体思想・グラムシ・ホルクハイマー・アドルノなどの思想、そしてバウハウス・中野秀人・小栗虫太郎・満鉄マルクス主義まで、実に多彩な 30 年代における現象である。中でも冒頭の桑野弘隆論文が扱う、グローバリゼーションの進行を前にして、現在の体制を総力戦体制からの連続と捉えるのか断絶と捉えるのか（「回帰か終焉か」？）という問いは、誰もが避けて通れない問題のはずである。

## 『民族の理論』

南有哲著(文理閣、2625 円、2007 年)

エンゲルス、バウアー、スターリン、高島善哉や湯浅赳男、そして主体思想にいたるまで、マルクス主義思想が「民族」をどのように論じてきたかを多角的に検証した論文集。その背景にあるの

は、民族紛争が激化する現在、「民族自決」や「内政不干涉」といった主張が少数独裁政権やテロを擁護するものとなってしまっていないか？という問いである。著者は「民族自決」を無条件に善であるとする思想からは距離を置きつつも、生命の再生産活動を円滑に行う上で障害とならない範囲で、これを承認している。資本制国家の揚棄とともに民族も同時に消滅するなど性急に考えるのではなく、あくまで現実と向き合いつつ思考を深めており、なによりエンゲルスやバウアー民族論の変遷について、類書に見られない成果を上げている。

## 『グローバル化の権利論』

### —民主主義とナショナリズムと人権—

碓井敏正著(明石書店、2100円、2007年)

人権の置かれた複雑な状況を整理し、その上で人権の発展のために何が求められているのかを明らかにすることを課題としてかかげ、グローバル化の中で、人権もまた、国民国家の制約を越える展開が求められていることに重点を置いて議論が展開される。

書き下ろしの序章のほかは、各紙に掲載された論稿11本からなる。1本を除いて2005年に発表され、うち6本(第2～7章)は、『人権21』(岡山人権問題研究所)に連載されたものである。全体は3部に分けられ、第I部で、人権をナショナリズムの呪縛からいかに解放するかという、本書の中核をなすテーマが集中的に論じられている。第II部では、リベラリズムとコミュニタリアニズム、責任、自己決定、教育という主題とのかかわりで、権利をめぐる問題が論じられる。第III部は、直接のテーマとしては正義や公正を取り上げている。終章で、「動物の権利」や未来世代への責任が論じられ、それにかかわって権利概念の境界が問題となるように、正義や公正にかかわる諸主題をつうじて、権利にかかわる問題に照明が当てられるかたちになっている。

## 『現代倫理と民主主義』

牧野広義著(地歴社、1995円、2007年)

本書の前半は、ロールズ、ノージック、コミュニタリアンたち、セン、ハーバーマスの議論を順次検討し、ポスト・ロールズの社会哲学に見通しのよい概観を与えると同時に、この部分はすべて書下ろしである。後半は、いわゆる「応用倫理」の主題から、環境倫理、生命倫理、企業倫理を取り上げ、最後に、日本国憲法が体现している諸価値を、現代の倫理的課題との関係で、整理・検討している。後半は、企業倫理の章を除いて既発表の論稿にもとづく。

コミュニタリアンらによるロールズ批判に見るように、現代倫理学の大きな問題のひとつは、公正な社会を構成する「市民」と、「人間」の具体的な生活過程とがどう結びつくかである。著者は、この点で、「ケイパビリティ」概念を中心とするセンの議論を、いくつかの留保つきながら高く評価している。また、後半では、「人間の尊厳」という概念が、生命倫理の諸議論とのかかわりで検討される一方で、日本国憲法における人間の尊厳＝生命の権利を核とする個人の尊重の中心的位置が強調される。このように、本書には、具体的な「人間」と、「市民」に立脚する民主主義社会のかかわりが、一貫したテーマとして流れている。

## 『エコマルクス主義』

### —環境論的転回を目指して—

島崎隆著(知泉書館、3675円、2007年)

本書は、アメリカにおける論争に著者の新たな視点を補うことにより、「エコマルクス主義」の定義の構築を試みた意欲作である。

序章では、エコマルクス主義という言葉をとるべく様々な定義づけからみうけられる問題を把握し、本論へとつなげてゆく。

第1部は、マルクス主義の唯物論的見解のマルクスにそった吟味により、おのずとその環境論的転回がなされるはずだという問題意識によって展開されてゆく。エンゲルスの自然弁証法とそれにたいする西欧マルクス主義の評価に関する論争か

ら不十分な点を洗い出し、著者の把握する弁証法的な「実践的唯物論」の重要性を指摘する。そのうえで“Stoffwechsel”の正確な理解は、人間—自然関係の二つの側面を理解するために重要な視点であることが考察される。

第2部では、『経哲手稿』の「自然は人間の非有機的体である」という有名な一文を考察し、「非有機的体」とは何か、その意味の考察を通して、アメリカでの論争に不足している側面を洗い出すことによって、唯物論の見解にたいする正確な把握のための結論をより説得的に論じてゆく。最終章では、著者のスタンスと今後の社会展望とが描写されている。マルクスその人の視点に立脚することの必要性を一貫したテーマとし、そのうえでエコマルクス主義の理論的構築を目指した、必読の一冊である。

## 『現代課題の哲学的分析

### —環境の危機・人間の危機

#### ・アイデンティティの危機——』

河野勝彦著(晃洋書房、2835円、2007年)

「環境危機をいかに克服するか」と題された第1部では、現存の環境倫理にたいする批判・検討から、人間存在の根源まで包括的に考察しうる環境哲学構築の重要性が指摘される。

第2部は「人間の危機」と題され、現代社会の危機的状況がいかに個人のアイデンティティに影響を及ぼすのかを、わたしたちのコンピュータ社会とのかかわり・家族とのかかわり・宗教とのかかわりからえぐりだしてゆく。

第3部では、著者のデカルト研究の結晶ともいえるべき考察から、人間のアイデンティティの危機へとせまってゆく。まず、デカルトにおける機械論的自然観への一面的な批判がいかに誤ったデカルト理解に基づくのかを考察し、デカルトは「身体と一体となった自我」を主張したことを丹念に考察し、その現代的意義をみいだしてゆく。最後の章では、著者の人間理解が示される。それを裏付けていくために、まずは生物進化に依拠する人

間観を積極的に肯定しつつその限界性が見極められる。続いて、その限界性を克服するために、言語的能力を生物進化と人間の表象形式・概念的志向のあいだに介在させることによって、人間が高次な知的機能を持ちえたという点が、コンディヤックやヴィゴツキーの議論によって考察されてゆく。

デカルトの丹念な理解にもとづき、現代の私たちのアイデンティティ危機にたいする意味づけがなされた、必読の名著である。

## 【第101号掲載分】

### 『創造の生へ』

清 真人著(はるか書房発行、星雲社発売、

2200円+税、2007年10月)

著者は大学で「イジメと倫理学」という講義をここ数年行っており、学生たちのレポートの紹介から本書は始まる。いじめは今や日本の若者の成育史の特徴的経験を構成するまでになっている。いじめの分析を通じて著者は子供たちにとって世界のリアリティが希薄化していること、人生は生きるに足るものだという世界への信頼関係が危機にさらされていることを鮮やかに描き出す。この世界からの脱出は、「小さいけれど別な空間を作る」という実践的な経験を積むことにより果たされる。

本書は4部構成となっており、いじめを取り上げた第1部に応えて、第2部ではブーバー、フランクフルを紹介しつつ、「応答責任」の倫理が展開される。第3部では、「中間社会」という概念を軸に、阿部謹也の世間論が和辻哲郎などの日本社会論と対比され、スリリングに展開される。第4部では「出会いと解放のための自己表現」として、音楽や絵画などの芸術表現をも含んだ活動経験が述べられる。

理論的には、ニーチェとブーバー、サルトルを対比したがっちりとした構成である。と同時に、本書には著者が長らくかかわってきた「文化組合」

の実践の蓄積がうかがわれる。それが本書に独特の魅力を与えていると言えよう。

## 『人間とは何か』

### 過去・現在・未来の省察』

C.v.ヴァイツゼッカー／新垣誠正ほか訳

(ミネルヴァ書房、4000円＋税、2007年10月)

昨年物故したドイツの物理学者・哲学者の晩年の著作。著者は1912年生まれで、ヴァイツゼッカー大統領の兄でもある。本書では、人間は何者なのか、自然の歴史、人間はどこから来たのか、時間・物理学・近代形而上学、現代学問論、哲学の素描、宗教の射程、人間はどこへ行くのか、といった多岐にわたる主題が論じられている。その該博な知見にはおどろかされるばかりであり、多分野にまたがる知的関心をもっていた著者の面目躍如たる一冊である。いうなれば本書は、広い視野に立った西洋文明論であり、プロテスタント精神に裏打ちされた良心的学者の誠実な姿勢がうかがえる。講演原稿をふくめ、よみやすい訳文であることも、読者にはありがたい。理論物理学にうとい読者や、逆に狭い意味での哲学に詳しくない読者でも、あまり抵抗なく読めるであろうし、またキリスト教文化を知るうえでも有益であろう。

## 『新自由主義の嘘』

竹内 章郎 著

(岩波書店、1300円＋税、2007年12月)

岩波書店から刊行中の若者・初学者向けの双書『哲学塾』全15巻の一冊。現在、日本の哲学分野で活躍中の壮年の哲学者たちの作品が並んでいる。唯研会員の一冊がそこに加わったことを喜びたい。広い影響力を持つ仕事となろう。内容は、著者がずっと主張し続け、彫琢してきた「能力の共同性」論を、現代の市場万能主義／新自由主義の「自己チュー」の嘘を暴くかたちで、初学者にもわかりやすく展開したもの。とはいえ、どちらかといえば難解で知られる著者の作品、けっして軽く読み流そうなどと思っはいけない。11の講義の形式をとっているが、前半はさながら若者向け『資本

論』、中盤が社会権の原理論（市民権批判）、終盤は新自由主義への根底的批判、そして最後にそれらの議論を絡めるようにして「能力の共同性」が鮮やかに浮かび上がる。初学者ばかりでなく、「能力の共同性」を深く知りたい専門家にとっても、きつと勉強になる。

## 『コミュニケーションと関係の倫理』

種村 完司 著

(青木書店、2200円＋税、2007年8月)

はじめに著者が語るの、哲学の営みとは「時代を診断する営み」であるということ。そうでなければ、哲学は「けっきょく誰の心も動かさず、誰からも相手にされないだろう」。本書は、そう語る著者が、子どもの心身をめぐら問題と現代のコミュニケーション関係の危機的状況に切り込んで、現代日本の時代の病巣に迫ったものである。2部構成だが、通して読むと、オウム若者も含めた現代における心身の希薄化の問題（1部）とコミュニケーション不全の危機的様相（2部）とが、一つの社会的病理としてとらえられていることがわかる。ただし病理の分析は安易な療法を指示するものではない。著者の立場は、その一連の課題を個人の人格的モラルによってではなく、現代における社会的・関係的モラル（倫理）の形成によって引き受けようとするものだ。最後の補論は、著者の10数年にわたる「鹿児島いのちの電話」への取り組みの記録である。著者のこうした時代診断がけっして机上のものでないことがわかる。

## 『現代に挑む哲学』

尾関 周二 ほか 編著

(学文社、2000円＋税、2007年11月)

東アジア共同体が喧伝される昨今、たんに経済的共同体構築やその是非に終始するのではなく、その思想的意味を種々さぐってゆく必要があるだろうが、本書もその試図のひとつで、日本哲学会と中国社会科学院哲学研究所・中華日本哲学会が主催した日中哲学シンポジウム「21世紀における哲学の課題 東アジアの問題と観点から」をふ

まえて編集された論集である。吉田傑俊「グローバリゼーションと共生の思想」、高田純「自然の内在的価値と人間の尊厳」など日本人研究者の論文と、中国人研究者の論文の論文、あわせて15本が収録されている。第Ⅰ部「21世紀の理念と課題は何か」、第Ⅱ部「グローバリゼーションの哲学的意義」、第Ⅲ部「環境・共生・生命をめぐる哲学的考察」という構成から、各論文の方向性がうかがえる。吉田傑俊論文では、ヌスバウム、セン、サイード、竹内好、福沢諭吉らをふまえ、東アジア共同体が向かうべき理念と文明が示唆される。高田純論文では、自然の内在的価値や自然の累層性、自然にたいする義務などを論点としつつ、環境倫理学と生命倫理学との統合がこころみられる。本書の各論文は、あまり長いものではないので、わりあい気軽に読めるであろう。

### 『共感の思想史』

仲島 陽一 著

(創風社、2000円+税、2006年12月)

本書は会員の仲島陽一氏による「共感」という個別テーマでの思想史の試みである。著者の仲島氏はまず、日本語における共感と同情の語の意味の変化を整理し、次に、仏教をはじめとした源流思想、デカルト以降の近代思想、そしてマルクス以降の現代思想をとりあげる。その際、著者は二つの問題関心によって接近してゆく。第一に各思想家への関心からであって、その思想家の思想全体の特徴づけを行いながら、そこでの共感論の中身を明らかにする。第二に、現代の私たちにとっての共感への関心からであって、私たちなりの問題意識を持ち込んで各思想家の共感論を読解し、そこから学ぼうとする。

こうして、各思想家の共感論がその固有のキーワードを通して明らかにされる。例えば、仏教の「慈悲」、儒教の「仁」または「恕」、アリストテレスの「親愛」、デカルトの「憐れみ」、ショーペンハウアーの「共苦」、などなど。読者は、源流思想の部分では、宗教性・呪術性・神秘主義からの共感論の解放という方向を、また近代思想では、

ヒューマニズムあるいは市民社会という基盤の上での共感論の形成を、そして現代思想では、共感論の現代的反省と現代的応用を、それぞれ読み取ることができよう。

古今の思想家の共感論を概説した本としては類書がなく、その点での意義を本書は持っている。同時にまた、例えば感情管理の問題のような、現代の共感論にとっての諸テーマが随所に言及されていることも、本書を興味深いものとしている。

### 『「資本論」から哲学を学ぶ』

牧野 広義 著

(学習の友社、2300円+税、2007年9月)

著者が担当した、関西勤労者教育協会のゼミナール、和歌山県勤労者学習協会の講座をもとに編集された一冊。牧野広義氏は、誠実な姿勢でたゆまず資本主義の矛盾を突き、その変革を志向しているが、本書は資本論第1巻にみられる哲学のエッセンスをわかりやすい口調で解説した好著である。マルクスはヘーゲル哲学を批判しつつ自己の哲学を組み立てていったので、マルクス読解にはヘーゲル理解が欠かせないが、本書にはヘーゲルにかんする解説も盛りこまれており、読者の助けになる。古典とは、たんに古い時代に書かれた作品ではなく、現代においても読む意味がある作品を指すと思われるが、140年前に刊行された資本論は、著者もいうとおりに決して古くなっていない。新自由主義があたりまえのように浸透しつつある現代世界において、資本論の意義は再認識されてよいだろう。資本論の序言に引用されている「すべてははじめはむずかしい」という諺のとおり、歴大な厚さの資本論をまえにたじろいできた人も、コンパクトな本書を頼りに資本主義社会の分析に入ってゆけるだろう。

### 『介護福祉のための倫理学』

藤谷 秀 ほか 著

(弘文堂、1900円+税、2007年10月)

「介護福祉士のための教養学」シリーズの1冊で、事例編と理論編で構成されているが、藤谷秀

氏が執筆した理論編の第1章～第9章が、本全体の約7割の量をしめる。そこでは、倫理学の本質的内容として、個人の尊重、人間としての平等、社会権としての生存権、依存しない自立と共に生きる自立、など、全国唯研でも論点となっている社会倫理的・社会思想的テーマがくりひろげられている。しかもそれが、筆者特有のやわらかい語り口で、予備知識がなくても理解できるように述べられているのが特徴的である。しばしば倫理学の概説書や入門書は、斯界で定着している基礎的概念を前提してそれを平易に説明することに汲々としている感があるが、本書では、日常生活や現実の社会に立脚して、そこから生ずる疑問や苦悩に焦点をしばり、その本質をさぐり解決の道をみいだすうえで必要におうじて倫理学や社会学の古典が参照される。これらはおおいに共感できる叙述で、「介護福祉士のため」にかぎらず、倫理学ないし哲学の授業を受ける大学や専門学校の学生のためにも、きわめて有益であると思われる。

## 『フツーをつくる 仕事・生活術

### 28歳編』

新しい生き方基準をつくる会著，中西 新太郎監修  
(青木書店、2000 円+税、2007 年 6 月)

近年の格差貧困化の劇的進行のなかで、若者がフツーの生活を確保することさえままならない状況が生まれてきています。しかし、この間の日本社会の右傾化や保守化の進展のなかで、若者は自らの労働や生活にかかわる権利について十分な情報を与えられておらず、労働組合や社会保障制度などその権利を主張するための社会的な支援制度についても知らされていないのが実態です。自己責任論ばかりが強調される中で苦しみ困惑する若者が大勢います。今や、若者が希望をもって働き生活出来る社会を語るきっかけを見出すことさえ困難な状況が生まれていますが、フツーの生活を取り戻すためにも、いまこそ声を上げ、仲間と連帯し、民主主義的にまともに働き、生活と社会関係、人間関係を自らの手で作り出す生活現場の実践と知恵が必要です。本書は、28歳という、若者

のなかでもっとも将来について思い悩みまた転機となる年齢層に焦点をあてながら、フツーの生活を取り戻す手だてを彼らが実際の場面で直面する就職、職探しから仕事の継続、転職、無権利状態や過度労働や低賃金とどう立ち向かい闘うのか、どう連帯し、またどのようにトラブルを解決するのか、どのような制度や組織が助けとなるのか、懇切丁寧に伝え共に考えるように作られています。労働だけでなく、友人関係、男女関係、結婚、家庭生活などをも含めて、若者が直面する生活上の困難や悩みに答える内容です。そのように本書は、これまでの学校教育では十分伝えられていない現実に即した生活の知恵を新しい社会状況に対抗する新しい生活技術としてとらえ返すものであり、時代状況にかみ合った画期的な試みです。焦点は、学生に絞られているわけではないですが、これこそ現代を生きるための教科書であり、学生が読んでも我がことのように感じられると思います。実際の生活場面で実用可能な知恵がもられています。ぜひ、教育現場や実践分野で広く利用することを薦めたい本です。

## 『社会保障でしあわせになるために』

京都府保険医協会編 後藤 道夫 ほか 著

(かもがわ出版、1500 円+税、2007 年 10 月)

本書は京都府保険医協会が組織し、後藤道夫氏や伊藤周平氏ら研究者、法律家グループが2004年来進めてきた社会保障基本法創設運動の成果である。ソフトタッチのタイトルや表紙になっているが、「社会保障基本法への挑戦」というサブタイトルから予想されるように、その内容は社会科学的な学術書である。

つまり、第一部ではまず、現代日本において深刻化する貧困の現状が概念の基本的な定義と統計にもとづいて解明され、次に、この間の新自由主義的な構造改革が社会保障領域に及ぼした悪影響について詳しい分析が与えられたうえで、社会保障基本法の制定運動の意義と課題が論じられている。さらに第二部では、著者たちが構想した前文と17の条文とからなる社会保障基本法案が掲げ

られ、逐次その主旨が説明されている。著者たちはこの法案を日本国憲法の第25条や第13条を根拠に展開しているので、本書はまさに憲法を基礎にした日本型福祉国家の定礎・発展を積極的に展望するものである。

読者はここから社会保障運動の指針を読み取ることができるだけでなく、社会保障の本質規定や社会保障国家（福祉国家）の骨格など、めざすべき国家のかたちを学ぶこともできる。「福死国家」的な日本の現状を鑑みると、こうした意欲的な試みがさらに、多様に展開されることを大いに期待せざるを得ない。

### 『環境倫理の新展開』

木村 博 ほか著

（ナカニシヤ出版、1900円+税、2007年11月）

本書は、一般にはまだあまり知られていないドイツ系環境倫理論をコンパクトに紹介した好著である。

本書は3部からなる。第1部「近代的自然観と環境」では、近代自然科学の自然観（1章）を概観し、その批判としてのディープエコロジーの意義（2章）とその問題点（3章）を確認する。第2部「近代の自然観」では、エマソンなどアメリカ文学（4章）、ソロー（5章）、カント（6章）、スピノザ（7章）、シェリング（8章）の自然観の意義を再発掘する。これらを受けた第3部「新しい環境倫理」では、ヨナスの実践哲学（9章）、アービツヒの環境倫理（10章）、ジープの具体的倫理学（11章）を踏まえ、環境問題対決への新方向を「狭義の具体的倫理学としての自然倫理学」と展望する（12章）。

周知の如く従来の環境倫理の論議空間の主役だった英米環境倫理学は、自然中心主義と人間中心主義の“二項対立の不毛さ”の露呈等、“ゆきづまり”状況にある（“途上国”や非西欧文化からの批判に加え、アメリカでの環境プラグマティズムの台頭等）。構成からも窺えるが、本書の意義と特徴の第一は、この“ゆきづまり”打開の方向として、二項対立を媒介する自然哲学の伝統とカント以来

の責任倫理の伝統を統合するドイツ環境倫理の継承展開を提起し、環境問題解決の倫理的展望を提示する点にある。第二に、それを通して、特に日本では“無用の空論”とみられがちな哲学的環境倫理学の実践的意義を鮮明にしている。その核心は、問題解決にとっての普遍的自然観・世界観の決定的意義を焦点化し、「大きな物語」喪失の混迷の中で改めて哲学（的理念）の“復権”を言う点にある。それは、近代普遍主義批判からの“合意”論的方法的媒介という周到さ故に、一層意義深い。第三に本書は、「環境倫理の新展開」のプロセスや自然観の自然哲学的蓄積が丁寧かつ簡潔に示され、テキストとしても魅力的である。

ただ、本書の性格上やむをえないとも思うが、本書では西欧哲学伝統の自然概念を疑うことなく前提している。それは温暖化問題のようにグローバル環境倫理の地平では議論しやすいが、普遍主義克服如何の問題を残す。例えば半自然・人間化された自然が常態の日本の環境問題の地平や日本的自然観とどうリンクするかは見えにくい。本書がいう「新しい展開」が「具体的倫理学」である以上、さらにローカルな環境倫理や非西欧社会の環境問題の次元でどう“具体的”たりうるか、今後の楽しみでもある。

### 『動物虐待とホロコースト』

#### 永遠の絶滅収容所』

チャールズ・パターソン著、戸田清訳

（緑風出版、3000円+税、2007年5月）

本書は、人間の大量虐殺と動物の虐待への私たち人間の態度に、どのような共通性があるのか、その点に迫った名著である。

第1部。第1章は、人間がその歴史において動物を家畜化するにあたって、動物にたいする人間の道徳的な優越性という視点がいかに宗教や思想に反映されていったのかがまず語られる。その視点は、人々が他の人間を動物とみなすような思想の進展をもたらし、侵略・奴隷の正当化に使われたと分析する。第2章は、先住民への侵略や近代の戦争において、現地の人々が動物呼ばわりされ、

いかに多くの悲劇が生じたかが詳細に描かれる。

第2部、第3章・第4章の内容は、冒頭で紹介されるアドルノの「アウシュビッツは、誰かが屠畜場を見て、あれは動物に過ぎないと考えるところなら、どこでも始まる」ということばに収斂されるだろう。アメリカで発達した畜産業界。屠畜場の流れ作業のラインから自動車の製造ラインへの応用、そしてその技術が優生学にもとづいた人間の殺戮へと応用されるプロセス。これを大々的な反ユダヤキャンペーンによって世に知らしめたのが、かのヘンリー・フォードであった。4章では、アメリカでこのプロパガンダと共に隆盛を極めた優生学思想とその人間殺戮技術が、ユダヤ人殺戮の根拠を欲していたナチスドイツといかに密接に結びついていたのかが詳細に分析される。第5章は、人間が人間を殺害することの困難さから、それを克服するために何が行なわれたのかに焦点が移ってゆく。殺害をより「人道的」なものにするという解決策。しかし、それは殺害遂行者が人間としての苦しみを感ぜないようにすばやく殺戮を行なうという意味での技術の向上にすぎない。

第3部、第6章では、ホロコーストを生き延びた人々およびその後代の活動家のプロフィールがとりあげられている。第7章では、人間が動物と人間とにたいして行なっている残酷な行為の共通性を訴え続けた作家、アイザック・バシェビス・シンガーの生き様が描かれる。第8章では、ドイツの動物擁護活動家のプロフィールがとりあげられる。第3部は、ナチスの時代を正反対の立場に生きた人々の動物愛護意識をみることができ、大変興味深い。

様々な側面から動物への残酷な行いと人間への残酷な行いへの共通点に光を当てた名著であり、御一読をお薦めしたい。

## 『環境思想と人間学の革新』

尾関 周二 著

(青木書店、3000円+税、2007年4月)

本書は、共生と共同を基盤とする人間存在とい

う視点に立った連続する著作、『現代コミュニケーションと共生共同』『環境と情報の人間学』（いずれも青木書店刊）と3部作をなし、とくに環境思想の人間観を深化させることを目指したものである。

筆者である尾関は、哲学の「コミュニケーション論的転換」にあたって「労働とコミュニケーションの内的連関」を導入することで近代哲学の道具主義・科学主義の克服をめざし、そのことを通じて現代資本主義批判を展開してきた。本書では、とくに「エコ・コミュニケーション論的転換」という視点から、共生共同をキーワードに自然と人間の関係をとらえる際の哲学的論点が検討されている。また、新自由主義の席卷する現代において、共生共同という「人間にとっての自然さ」を全面展開する道こそ環境思想として求められることを示し、広汎な共闘の呼びかけとなっている。この点もまた本書の意義として高く評価すべきである。

本書は、3部9章の構成をとり、生物学と哲学の対話といった趣を持って人間観の基礎を示した第1部、日本の環境思想の可能性を検討した第2部、共生共同にもとづくエコロジカルな社会の青写真を示した第3部からなっている。以下それぞれを簡単に紹介しておこう。

第1部は「人間と自然をめぐって」として、現代生物学の成果に広くふれながら、人間と自然の問題とともに心と身体の問題を取り上げている。とくに小原の「人間にとっての自然さ」を手がかりに、人間と自然の二元論、機械的自然観、孤立的人間観をしりぞけ、人間の生命性としての共同的存在性同を基底においた人間観にたつことを求めている。第2部は「日本の思想家にさぐる環境思想の人間観革新の可能性」として、今西錦司から人間と社会の存在論としての必然性を、安藤昌益と田中正造から商品経済批判、資本主義批判を取り上げている。第3部は「共生共同の理念と持続可能社会の構築」として、共生共同理念の検討ののち、リベラリズム・コミュニタリアニズム論争やコモンズ論を取り上げ、共同体とアソシエーションの関係、公共圏と生活世界の関係について

吟味し、伝統的共同体の閉鎖性を克服しつつ地域性という自然的要請を尊重した社会のあり方を模索している。

## 『デンマークのまちづくり

### 共同市民の生活空間』

小池 直人・西 英子 著

(かもがわ出版、2400 円+税、2007 年 12 月)

本書は、デンマークの市民参加型の民主主義を体現する「まちづくり」に注目し、新自由主義の跋扈により閉塞状況をきたしている社会にたいして、第二の道を提供しようという意欲的な共同研究の書である。

序章では、本書の基本的な概念が述べられている。デンマークの人々は、風土的要素・創造性・コミュニティの要素をふくむ「まち」づくりを、「ガバナンス」と「ガバメント」の両者を統合するかたち（「コ・ガバナンス」）で実質化している。このプロセスの中でアクティブに政治参加する市民のあり方は「共同市民性」と呼ばれる。このようなまちづくりの雰囲気なかで、コミュニティのあり方について住民の意志を集約する役割を果たす人々は「日常調整者」と位置づけられ、昨今注目されている「社会関係資本」を超えた文化的資源、すなわち「政治関係資本」がこのような人々を輩出する背景になっているという。

第2章では、住宅政策における住民の積極的参加の意義が、テナント・デモクラシーという概念から深められている。

第3章では、豊かなまちはいかに「共同市民性」に依拠しているかを、まちづくりの実践に着目して迫っている。

第4章では、オイルショックとその後の経済的停滞の危機を乗り越える段階で生じた自治体などの公共組織の転換と市民の福祉をまもるという公共性の理念的な転換との連関が、まちづくりにおける「日常調整者」の役割から原理的に深められている。

第5章では、貧困の克服、コミュニティから排除され孤立している人々の状況の克服という二重

の意味での包摂が、デンマーク型の民主主義哲学の進展においていかに形づくられてきたのかを、ハル・コックやグルントヴィなどデンマークの思想家・研究者の理論のあたえた影響や、福祉型の社会を形成する上で相互に不可分な自由と平等の概念、共同・共生の概念といった諸点から深められてゆく。そして「デンマーク社会からの最高の贈り物は何かと問われれば、その社会の中に生きて働く民主主義の哲学だと答えたい」という著者のことばで結ばれる。

本書では、デンマークの民主主義を支えてきた根本的な理念、すなわち、経済的な平等性の重視と、それに立脚しはじめて成立する参加型の民主主義に関する積極的意義が一貫して主張されている。新自由主義的風潮が跋扈し、経済格差などの諸問題に直面している現代日本の社会の行く末に一石を投じた、一読をお薦めしたい名著である。

## 『エコロジーのコミュニケーション』

ニクラス・ルーマン著、庄司信訳

(新泉社、3000 円+税、2007 年 10 月)

1984年に『社会システム理論』を上梓して自らの理論の抽象的な見取り図を明らかにしたルーマンが、その2年後、「現代社会はエコロジーの危機に対応できるか」をテーマに、その具体的な適用例を示した小著である。「社会システムと環境の複合性の差異」を出発点とする社会システム理論は、〈環境〉に関する〈社会システム〉内部のコミュニケーションをどのように記述するのか。—経済・法・学術・政治・宗教・教育の機能システムごとに、その理論的道具の大半をつかって説明している。ルーマンらしく、環境問題に「どう反応すべきか」という結論を性急に導き出すことはせず（末尾では環境倫理がもっとパラドクスに明敏になることを求めている）、むしろ「どう反応しているか」を理論的に描写することに課題を限定する。しかし、道具箱の紹介ばかりが先行した日本のルーマン研究にとって、(『情熱としての愛』など少数の例に加えて) その具体的適用を示した

著作の新訳が出るのは喜ばしい。ルーマン理論の広範な魅力を包括的に表しているという意味でも、関心のある者が最初に手にとってよい著作であるし、なにより、その翻訳の水準はこれまでのルーマン研究の集大成とも言える素晴らしさである。